



Title	＜翻訳＞トマス・キッド『スペインの悲劇』 翻訳(2)
Author(s)	キッド, トマス; 中村, 未樹
Citation	大阪大学英米研究. 2017, 41, p. 47-91
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99407
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

トマス・キッド『スペインの悲劇』翻訳 (2)

中村 未樹

以下に掲載するのは、エリザベス朝の劇作家トマス・キッド (Thomas Kyd, 1558～1594) による『スペインの悲劇』の後半部分 (3 幕 7 場から 4 幕 5 場まで) の翻訳である。(前半部分の翻訳については『英米研究』第 40 号を参照されたい。)

登場人物 (後半)

アンドレアの亡霊	生前はスペインの宮廷 人、ベル＝インペリアの 元恋人	ベル＝インペリア 小姓 クリストフィル	カスティール公爵の娘 ロレンゾに仕える ベル＝インペリアに仕える
復讐の神		絞首刑係	
ヒエロニモ	スペインの司法官	ポルトガル大公	
イザベラ	ヒエロニモの妻	ペドロ	ポルトガル大公の弟
侍女	イザベラに仕える	バルサザー	ポルトガル大公の息子
ジェイクイーズ	ヒエロニモに仕える	ポルトガル大使	
ペドロ	ヒエロニモに仕える	ポルトガル人 1, 2 市民 1, 2, 3	
スペイン国王		絵描き	
カスティール公爵		老人	
シブリアン	スペイン国王の弟	その他	
ロレンゾ	カスティール公爵の息子		

第3幕

第7場 ヒエロニモ登場。

ヒエロニモ どこに走って行って私の悲しみを話せばよいのだろう、その重みで大地を疲れさせた私の悲しみを？どこで叫べばよいのだろう、死んだ息子のためのやむことのない嘆きで空を押し潰すばかりの私の叫び声を？吹き荒れる風は私の言葉と協力して、私が嘆けば木の葉を落とし、牧草地の植物の花を取り去り、涙の洪水で山を沼地に変え、地獄の真鍮の門を突き抜けていく。しかし、私の魂は途切れ途切れの溜息と絶え間ない苦しみによってずっと苛まれている。そして翼を付けて空に舞い上がり、光り輝く天の窓を叩いて正義と復讐を求めて嘆願する。だが、神々はダイヤモンドの二重の壁で守られた天の最も高い場所において、そこはどんなものも通さない。私の嘆きは遮られ、言葉はどのようにしても伝わらないのだ。

絞首刑係が手紙を持って登場。

絞首刑係 あなた様に神の御恵みがありますように。あの男、ピーターゲイドとかいう、ふざけたことばかり言っていた者のことですが――。

ヒエロニモ あの男がどうしたのか？

絞首刑係 処刑は誤りでした。あの男はそれとは全く逆のことを指示した紙を持っていました。これです。間違ったことをしてしまいました。

ヒエロニモ いいから渡しなさい。(手紙を受け取る)

絞首刑係 私が縛り首にならないように庇っていただけますでしょうか？

ヒエロニモ ああ、わかった。

絞首刑係 感謝いたします。(退場)

ヒエロニモ 私にはもっと切実な問題があるのだが、その苦しみを和らげるためにこれを読む間は悲しみとは休戦しよう。(手紙を読む)「辛い目に会っておりますので手紙を差し上げました。私を釈放するように手配して

ください。お力添えがなければ私が助かる見込みはありません。それなら死ぬ時には本当のことを言いますから。ご存知のように、私はあなたのために彼を殺したのです、王子とあなた様の仲間となって。褒美と将来を約束する言葉に唆されて、ホレイショーを殺す手伝いもしました。」彼が私のホレイショーを殺す手助けをしたのか？そしてこの呪われた悲劇の役者だったのは、お前、ロレンゾ、そしてバルサザー、お前だったのか？私の息子、息子にお前は感謝していいはずなのに？私が聞いたことは何だったのだ、私が見たものは何だったのだ？神聖なる天よ、このような恐ろしい、そして忌まわしい行いが——完全に秘密にされ、長く隠蔽されていたのですが——この手紙によって明らかにされますように。あの時は疑おうとしなかったことが今では分かる。ベル＝インペリアの手紙は偽物ではない、それに彼女も嘘をついてはいなかった。あの者たちこそが、偽りによって彼女、私、ホレイショーを、さらには自分たち自身をも不当に扱ったのだ。今は彼女の手紙とこの手紙から、起こった事全てを繋ぎ合わせることができる。これまでは分からなかったが、今でははっきりと感ずることができる。あの者たちは天が罰せずにはおかぬことをしたのだ。嘘つきのロレンゾ、あれは人を騙すための表情なのか？私の息子にお前が与えた榮譽がこれなのか？そしてバルサザー、お前と私の魂に呪いあれ、彼がお前を生け捕りにしたのはこの身代金のためだったのか？あの無駄な戦争を引き起こしたものに災いを、お前の卑しさと捕囚に災いを、お前の誕生、肉体、魂、お前の呪われた父親と打ち負かされたお前自身に災いを！そして、息子がお前に情けをかけた日と場所が呪われますように！だが、なぜ私は何にもならない言葉を浪費しているのだ、血だけが私の悲しみを癒してくれるというのに？国王に訴えにいこう、正義を求めて宮廷で大きく叫び、老いて瘦せたこの足で道に敷かれた石を擦り減らそう。そして、訴えによって正しい裁きを得るか、あるいは復讐の脅しによって彼らを皆疲れさせるかだ。(退場)

第 8 場 イザベラと侍女登場。

イザベラ それではあなたはこの薬草が目を治すというのね、そしてこの薬草が頭を治すと？ああ、でもどちらも心を治すことはない！ええ、私の病気に効く薬はない、死人を生き返らせる薬もない。（彼女は狂い始める）ホレイショー、私のホレイショーはどこなの？

侍女 奥様、ホレイショー様のことでそのような激しい振舞いをしてご自身を傷つけてはいけません。息子様はエリュシオンの野原で静かに眠っているのです。

イザベラ あなたにガウンや他にも良いものをあげなかった？笛やおもちゃの鞭を買ってあげたわ、彼らの悪事に復讐できるように。

侍女 奥様、そのような空想の話を開くと私の魂は苦しくなります。

イザベラ 私の魂！憐れな魂——あなたは自分では知らないことを言っている。私の魂は銀色の翼を持って私を天の最上まで昇りゆかせる、天国へ。そこには私のホレイショーが光り輝く天使の集団に護られて座っている。天使たちは彼の治った傷の周りで踊り、優しい聖歌を歌い天上の調べを口ずさんでいる——この世の鑑として生き、そして死んだ罪のない彼を讃えるための稀有な調べを。でも、あの男たち、ホレイショーを殺した人殺したちはどこで見つけられるのだろう？どこに走って行って私の息子を殺した犯人を見つけたらよいのだろう？（全員退場）

第 9 場 ベル=インベリアが窓辺（二階舞台）に登場。

ベル=インベリア 私に対するこの酷い仕打ちはどういうことなの？なぜ私はこうして宮廷から隔離されているの、何の知らせもなく？このように私に対して密かに行われているおかしな危害の理由を知ることはできないのかしら？呪われたお兄様、残酷な人殺し、どうして私を苦しめるの？ヒエロニモ、私がなぜあなたに対する悪事について手紙で知らせたか、わかっているの？そうでなければ、どうして復讐を躊躇するの？アンドレア、あ

あ、アンドレア、あなたの友人ホレイシヨーのために私がこのように扱われ、彼が私のために理由もなく殺されたことをあなたが見ていてくれたら！でも、天が私の望むように私を自由にしてくれるまでは、何としてでも耐えて状況に身を任せなければいけない。

クリストフィル、二階舞台に登場。

クリストフィル さあ、ベル＝インペリア様、このようなことをされてはいけません。(全員退場)

第10場 ロレンゾ、バルサザー、小姓登場。

ロレンゾ 小僧、話はもういい、これまでのところうまくいっているな。あいつが死んだのは確かか？

小姓 私が生きているのと同じくらい確かです。

ロレンゾ わかった。死に際のあいつの勇気については、奴と今一緒にいる者が試すだろう。この指輪を持っていけ、クリストフィルに渡すのだ。妹を解放して、今すぐここに連れてくるように言ってくれ。(小姓退場) これは殺人を秘密にしておくための策です。そのことも、もう誰も気にしなくなりましたので、妹は自由にします。

バルサザー それが良いでしょう、ロレンゾ。昨日あなたも聞いていましたが、公爵が彼女のことを尋ねていましたから。

ロレンゾ ええ、彼女を連れ去った理由について十分に説明したのは聞きましたよね？だが、それはよいとして、王子様は妹を愛していますか？

バルサザー ええ。

ロレンゾ それでは気をつけてうまく対応してください。疑惑については何事もないようにふるまい、私に調子を合わせてください。もし妹が彼女の恋人や監禁のことで食い下がるようでしたら、彼女に冗談でも言ってください。騒ぎになりそうなことは冗談のようにふるまって隠すのです。彼女が来ました。

ベル＝インペリア登場。

ロレンゾ やあ、妹。

ベル=インペリア 妹ですって？あなたは兄ではありません、むしろ敵です。

それでなければ妹をこのように扱ったりしなかったでしょう。あなたはまず抜いた剣で私を脅かし、私の友人にとってもひどいことをした。それから激しいつむじ風のように急き立ててあなたの共犯者たちの中私を引っ張っていき、誰も来ない、そして受けた仕打ちについて伝えることもできない場所に私を閉じ込めた。あなたの理性は人を狂わせる怒りに乗っ取られてしまったの？私があなたを何らかのことで怒らせたと言うの？

ロレンゾ いいか、ベル=インペリア。私はお前にひどいことはしていない。

ただ、お前には不相应なほどに気を使って、お前と私の名誉を守ろうとしただけだ。

ベル=インペリア 私の名誉？ロレンゾ、私が自分の名誉を守ろうとせず、あなたや他の誰かがそれを回復しないといけないようなことがあったかしら？

ロレンゾ 国王と父上がヒエロニモに相談に行くことになったのだ、大公によって決められた財産のことで。

ベル=インペリア それが私の名誉にどう関わるの？

バルサザー 我慢して続きも聞いてください。

ロレンゾ 王と父上はすぐに行くと彼に伝えるため、そこにいた私を使いに出した。私が王子と行ってみると、思いがけず、お前がホレイショーと東屋にいるのを見つけたのだ。

ベル=インペリア それで？

ロレンゾ アンドレアの件でお前が以前に被った不名誉のこともあるし、それにまた卑しい者と一緒にいるのを見つかって今度は悪い評判がもっと長く続くだろうと思って、他に良い手がなかったからホレイショーを父から遠ざけたのだ。

バルサザー そして陛下に見つからないようにあなたを別の場所にこっそりと連れて行っただけです。

ベル=インペリア　そうですか、そしてあなたは兄がやったことの証人ということですね。優しいお兄様、私のためにそのように考えてくださったのですね。そして王子、あなたは兄の手下なのですね。全く素晴らしい、注目すべきことですわ。でも、その後私を隠しておいたのはなぜですか？

ロレンゾ　妹、お前の最初のお気に入りのアンドレアの死の知らせがあってからお前が塞ぎ込んでいたので、父上のお怒りはさらに激しくなっていた。

バルサザー　あなたの名誉のこともありますから、その場に居ないでお父上の怒りが静まるのを待つということでもよかったのです。

ベル=インペリア　でも、お父様のお怒りのことは何も聞いていなかったわ。

ロレンゾ　もしそれを話していたらお前はさらに荒れ狂っただろう、アンドレアが死んでお前はエトナ火山のように燃え盛っていたからな。

ベル=インペリア　ではお父様は私のことを尋ねたりはしなかったの？

ロレンゾ　尋ねられたから、このようにお前のことは弁解しておいた。(ベル=インペリアの耳元で囁く。) だが、ベル=インペリア、優しい王子を見なさい、彼の愛を見なさい、青年バルサザーを見つめるのだ。お前が居ることで彼の愛情はより大きくなった。彼の憂鬱の中にはお前の憎しみと彼の愛が、そしてお前が逃げて彼が追いかけるのが見えるはずだ。

ベル=インペリア　お兄様、どのような経験のせいかは知りませんが、前にお会いした時とは比べようがないほど弁論家になったのですね、私にはかなりしたたかに思えますわ。ですが、王子はもっと高尚なことを考えていらっしゃるのです。

バルサザー　王をも征服するあなたの美しさを思っているのです。私の自由を奪ったアリアドネの糸のようなあなたの髪を、そして私の希望が休む場所を見出せず、私の悲しみを映し出しているあなたのその白い額のことを思っているのです。

ベル=インペリア　愛して同時に恐れるというのは、女たちが考えていることよりは重大なことなのでしょうね。

バルサザー 愛しているのは私なのです。

ベル=インペリア 誰を？

バルサザー ベル=インペリアを。

ベル=インペリア しかし私は恐れているのです。

バルサザー 誰を恐れるのですか？

ベル=インペリア ベル=インペリアを。

ロレンゾ 自分を恐れているのか？

ベル=インペリア そうです。

ロレンゾ つまり？

ベル=インペリア 愛するものを失うことを嫌い、恐れるように。

バルサザー では私バルサザーがあなたを守りましょう。

ベル=インペリア 駄目です、あなたも私たちと同様、恐れていますから。

「私が恐れるのは、怯えた恐れと震える恐れを繋げることだけでなく、愚かな裏切りという無駄な仕事なのです。」(退場)

ロレンゾ そのように巧みに話をされるのでしたら、宮廷で今の会話の続きをやりましょう。

バルサザー 彼女の素晴らしい眼差しを道しるべの星として、哀れな悩めるバルサザーは行くのだ、旅を最後まで続けられるかわからないまま山を超えていく旅人のように。(全員退場)

第 11 場 二人のポルトガル人が登場。ヒエロニモは彼らと出会う。

ポルトガル人 1 すみませんが――。

ヒエロニモ (1602年版) あなたの考えていることでも、あなたの考えていることでも、そしてあなたの考えていることでもない。全く見当違いだ。この上靴は私のものではない、息子ホレイシヨ―のものだ。私の息子――息子とは何なのだ？数分の間に作られるもの、暗闇において生まれる塊、女性と呼ばれるあの軽い生き物の体を重くし、9 か月経つと光のある所に這い出てくる。父親が溺愛し、取り乱し、また狂ってしまうようなところがそ

ういう息子にあるだろうか？生まれてからは、ふくれっ面をして、泣いて、歯が生えてくる。このような息子に何があるだろうか？食事を与え、歩くことと言葉を教えねばならない。そうだ、他には？子牛を愛してもよいのではないかな？なぜ、飛び回る子供を息子として思い、涙を流したりするのか？子豚や綺麗な仔馬も息子と同じくらい人の心を動かすはずだ。動物ならすぐに成長して何らかの役に立つが、人間の息子は大きくなって成長するにつれて反抗的になり、両親を馬鹿扱いする。狂ったような騒ぎで親に心配をかけるし、年を取るまえに親を老けさせる、これが息子だ。正しく判断するなら、これで何か失ったということになるのか？ああ、だが私のホレイシヨは成長してからそのような気まぐれはなくなった。息子は両親を愛していた、そして私の慰めで母の喜びだった、彼は我が家を支える腕だったのだ。呪われた人殺し以外は彼を憎んだりできなかった。息子はまだ 19 歳の時にその逞しい腕で傲慢なバルサザー王子を馬から突き落とした。そして息子の偉大な精神は名誉に溢れていたのだ、あの勇敢だが卑怯なポルトガル人に慈悲を与えたのだ。だが、天は常に変わることはない。そこには復讐の女神が居て鞭もある、時に復讐の女神は殺人者たちに会うのだ。人を殺した者たちがいつも逃げられるとは限らない、それが慰めだ。そうだ、そうだ、そうだ、そして時が経ち、時が経ち、時が経って、怒れる力が火の玉に包まれた雷のごとく放たれて彼らを皆破滅させる。^(1602年版)さようなら、いや、行ってください。放っておいてくれましたらお暇しますので。

ポルトガル人 2 公爵様のところに行く近道はどれでしょうか？

ヒエロニモ それは私のすぐ近くです。

ポルトガル人 1 その方の家に行きたいのです。

ヒエロニモ ああ、すぐそこです、あそこに見える家ですよ。

ポルトガル人 2 息子さんはいらっしゃるでしょうかね？

ヒエロニモ なに、ロレンゾ様か？

ポルトガル人 1 はい。

彼は扉の一つから中に入り、また別の扉から出てくる。

ヒエロニモ それはやめてください、もっと我らにふさわしい話があるでしょう。ですが、もし行き方と場所を知りたいのであれば聞いてください、ちゃんとわかるようにしますから。あなたたちの左にある道は、罪悪感から不信と恐れ of 森へと繋がっていく、暗くて通るのが危険な場所だ。そこで憂鬱な思いに会うはずだ。その悪い蒸気を吸い込むと、絶望と死の岸壁へと導かれる。その崖は、この世の不正が燃やされて汚れておぞましい煙を吐き出している大きな、暗い谷の中にある。そこからそう遠くないところに、人殺したちが自分たちの呪われた魂のための住処を拵えている。激怒したジュピターが硫黄の炎の上に置いた真鍮の大釜の中、ロレンゾが煮えたぎる鉛と罪のない者たちの血を浴びているのがそこで見えるだろう。

ポルトガル人 1 ははは！

ヒエロニモ ははは！ははは！それではさようなら、はははさん。

ポルトガル人 2 あの男は間違いなく狂っているな、もしくは年のせいで耄碌したのだろう。さあ、公爵様に会いに行こう。(全員退場)

第 12 場 ヒエロニモが片手に短剣、もう一方の手にロープを持って登場。

ヒエロニモ 今から私が国王に会いに行く、国王は私に会って請願を聞いてくれるだろう。すると傍にいる者たちが些細な用件を持ち出して私を黙らせようとするなら、それは奇妙な事になるのではないか？ 奴らの魂胆はわかっている、もう何も言わない。ヒエロニモ、もう行く時だ。血の流れる谷を下っていくと、火の燃えさかる塔が立っている。その塔の中、鉄と溶かした真鍮で作られた椅子に裁判官が座っている。彼は地獄のある湖の方を指した松明を口に咥えている。ヒエロニモ、彼のところに行くのだ。彼がホレイシヨの死に対して正義を施してくれる。(短剣を指す) この道を行けばすぐに裁判官に会うことができる。(ロープを指す) もしくはこれだ、これならもう生きる必要もない。これか、あれか？ いや、急いではだめだ。もし私が首を吊ったり自殺したりしたら、誰がホレイシヨの殺

害の復讐を行うのだ？いや、いや、いや、すまない、これはもう要らない。(短剣とロープを投げ捨てる) この道を行こう、この道を国王がやってくる。(再び短剣とロープを取り上げる) そしてここで彼に訴えよう、きつと。バルサザー、お前には仕返しする、そしてロレンゾー、お前も。国王だ、いや待て、ここだ、ここだ、獲物が逃げていく。

国王、ポルトガル大使、カスティール公爵、ロレンゾ登場。

国王 さあ、大使よ、大公がどう言ったか教えてくれ。大公は協定に関する私の手紙を受け取ったのか？

ヒエロニモ 正義を！おお、ヒエロニモに正義を！

ロレンゾ さがれ、国王がお忙しのがわからないのか？

ヒエロニモ おや、そうでしたか？

国王 私の仕事の邪魔をする者は誰だ？

ヒエロニモ 私ではございません。(傍白) ヒエロニモ、気をつけろ。離れろ、離れろ。

ポルトガル大使 陛下、大公はあなた様の提案と同盟の約束についての手紙を受け取って読みました。彼は死んだと思って嘆き悲しんでいた息子が王子として丁重にもてなされているのを聞いて非常に喜んでおり、陛下にご満足いただけるよう、またその偉大な愛に答えるため次のような言伝をしています。まず、大公の息子である王子と陛下の愛すべき姪であられるベル=インペリア様との結婚につきましては、天上の怒れる神々に捧げられた没薬や香以上に喜ばしいものであります。それゆえ、結婚を祝う式を見るために、またスペイン国王とポルトガル国王の間の友好と末永い同盟による堅固で神聖な絆をスペイン宮廷の方々の前で結ぶために、大公ご本人が来られます。その際、大公は王冠をバルサザーに譲り、ベル=インペリア様を彼の王妃とするとのことです。

国王 弟よ、この大公の愛に満ちた返事をどう思うか？

カスティール公爵 これは間違いなく、大公があなた様を友として遇するために行った配慮、そして彼の息子バルサザーに対する愛情の表れです。ま

た、このように娘を気に入っていただき、私自身も大公に感謝せずにはおれません。

ポルトガル大使 最後に、大公はこれを送られました——と言っても息子様が戻られることを期待してではありませんが——ホレイショーに渡す王子の身代金です。(国王に金を渡す)

ヒエロニモ (傍白) ホレイショー？ホレイショーと呼んだのは誰だ？

国王 よく覚えていてくれた、大公には礼を申してくれ。これをホレイショーに渡すように。

ヒエロニモ 正義を！おお、正義を、正義を、お優しい国王！

国王 誰だ？ ヒエロニモか？

ヒエロニモ 正義、正義を！私の息子、私の息子、私の息子は釈放すること、取り戻すこともできないのだ！

ロレンゾ ヒエロニモ、場をわきまえろ。

ヒエロニモ 去れ、ロレンゾ、これ以上私の邪魔をするな、お前は私の幸福を台無しにしたのだ。息子を返してくれ、お前は私の息子を釈放できないだろう！どけ、この大地の腹を切り裂いて(彼は短剣で掘り始める)エリュションの野原へと渡り、そこから息子を連れ帰って彼の傷を見せてやる、私から離れろ！この短剣をつるはしにして、司法官の職は今ここで辞める、地獄の鬼たちを集めて、あなたたち全員にこのことの復讐をするのだ。

国王 この狂気は何事だ？誰も彼の怒りを鎮めようとはしないのか？

ヒエロニモ いや、落ち着いて、争う必要はありません。悪魔に駆り立てられた者は出ていかなければなりません。(退場)

国王 ヒエロニモに何があったのだ？彼があんな振舞いをするのは見たことがない。

ロレンゾ 陛下、ヒエロニモは息子のことでひどく慢心しており、それに王子バルサザーの身代金をわが物にしようと思って、おかしくなり狂った振舞いをしたのです。

国王 甥よ、それは残念なことだ。息子に対する父としての愛情の表れだろう。弟よ、彼にこの金を渡してくれ（カスティール公爵に金を与える）、王子の身代金だ。ヒエロニモの分け前は与えよう。彼に預けておけば、ホレイショが貰い損ねることはないだろう。おそらくヒエロニモはその金が要るのだろう。

ロレンゾ ですが、このように理性を失っていますなら彼には辞職してもらって、もっとしっかりした者に交替させるべきでしょう。

国王 そのようにしたら彼の鬱は余計にひどくなるはずだ。まずはよく確かめる方が良いだろう。それまではヒエロニモを罷免しないでおくことにする。弟よ、大使を控えの間に案内してくれ、彼にはバルサザーとベル＝インペリアの婚約の立会人になってもらおう。大公がこちらに来られるよう、結婚を祝う日取りを決めておかないといけなからな。

ポルトガル大使 陛下のお計らいを大公は喜びますでしょう、私からの報告を待ちわびておりますので。

国王 では行こう、大使、話を聞いてくれ。（全員退場）

（1602年版）第 12 A 場 ジェイクィーズとペドロ、松明を持って登場。

ジェイクィーズ 我らのご主人はなぜ、こんな真夜中に私たちを呼ばれたのだろう、松明を持たせて？ 強姦か殺人の機会を窺っている者たちを除いて、人や鳥、獣は皆休んでいる時なのに？

ペドロ ジェイクィーズ、ホレイショ様が無くなられてから我らのご主人様はひどく錯乱してしまったのだ。年老いたあの方は眠りについて心穏やかに過ごすはずの時であるのに、絶望した人のように息子様のことで狂われておかしくなる。机に座りながら、ホレイショ様が横に立っているかのように話されていることが時々ある。それから、怒り出して地面に倒れ、「ホレイショー、私のホレイショーはどこにいるのだ？」と叫ばれるのだ。過度の嘆きと心を傷つける悲しみのため、ご主人様は普通ではなくなってしまった。やって来られた。

ヒエロニモ登場。

ヒエロニモ 壁にある穴はどれもこれも覗いてみた、木も藪の中も全て探した、低木を叩き、我らの老母である大地を踏みつけ、水に潜り、天を見つめたが、私の息子ホレイションを見ることはできない。おや、誰だ？亡霊、亡霊か？

ペドロ あなた様の家来です。

ヒエロニモ 暗闇の中、松明を持って何をしているのだ？

ペドロ 灯をつけてこちらで待つよう、あなた様に言われました。

ヒエロニモ いや、いや、お前たちは騙されている、私ではなくお前たちが騙されているのだ。今、松明に灯をつけて待てと言うほど私は狂っているか？太陽神が栄光に包まれながら馬車に乗る昼の最中に松明を燃やすのだ。

ペドロ それでは灯が無駄になります。

ヒエロニモ それでよい。夜は悪事を露わにしようとはしない、人殺しの汚れた女性だ。そしてあそこに見える青白い月は暗闇で行われたことを許した。月の表面を見つめている星々は月の袖を彩る飾り、そして月の裾に付けられたブローチだ。力を持ち神聖な天上のものが、一番輝かねばならない時であるのに暗闇の中眠っていたのだ。

ペドロ 挑発するような言葉で天を怒らせてはいけません。神々は慈悲深いのです。不幸と悲しみのため、ご自分ではわかっていないことを話しておられますが。

ヒエロニモ 悪人め、それは嘘だ、お前は私が狂ったとばかり言っている。だが、それは嘘だ、私は狂ってはいない。お前がペドロ、そしてお前がジェイクウィーズだとわかっている、証明してみせよう、もし私が狂っていたらそうはできないだろう。私のホレイションが殺されたあの晩、月はどこにあったのだ、光を照らさなければいけなかったのに？暦を調べてくれ、もし月の光があったのなら——息子の顔には品があった、それは知っている、よく知っている——もし人殺したちが息子を見ていたのなら、たとえ

その者が血と死に飢えていたとしても、持っている武器を落として大地を傷つけていただろう。ああ、悪事が自分でも理解できぬことをするのなら、それに対して何を言えばよいのだ？

イザベラ登場。

イザベラ ヒエロニモ、中に入ってください、悲しみを増すようなことはやめてください。

ヒエロニモ そうだ、イザベラ。私たちはここでは何もしていない。私は泣いていない、ペドロとジェイクィーズに聞いてみなさい、本当に。とても愉快だ、愉快だ。

イザベラ 楽しいですって、ここで？この場所、この木は、私のホレイショーが死んだ、ホレイショーが殺されたところではないですか？

ヒエロニモ それで——言わないでおこう。彼女は泣かせておこう。これがあの木だ。種から私が育て、このスペインの暑い天候のため育たずに若木が枯れ始めた時は、毎朝二回欠かさず私が泉で汲んだ水を与えていた。ようやく大きく育って実を次々と付け始め、最後にこの木は絞首台になり、私の息子という実を付けた。お前と私の間の子供を生んだのだ。この悪い、悪い木め！（ドアを叩く音）誰が来たか、見てこい。

ペドロ 絵描きです。

ヒエロニモ 入って、何か慰めを描くように言ってくれ。本当に、絵に描いた慰めしかないのだから。中に入れろ、何が起こるかわからない——私がこの木を植えたとは！だが、同じように主人たちは恩知らずの家来たちを無一文から育て上げるのだ、後で、家来たちは自分を養ってくれた主人を憎むことになる。

絵描き登場。

絵描き あなた様に神の祝福を。

ヒエロニモ なに、この人を嘲る悪者め、どうやって、どこで、どのように私が祝福されるというのだ？

イザベラ 何の御用ですか？

絵描き 正しい裁きを求めています、奥様。

ヒエロニモ 思い上がった物乞い、この世に無いものがほしいのか？地下に眠っている全ての鉱石をもってしても、一滴の正義さえ買うことはできない——それは値段のつけようがない宝石なのだ。いいか、神が全ての正当なる裁きを買占めていて、それは神しか与えてくれない。

絵描き ああ、それなら、殺された私の息子のことで神様に正義を頂かねばなりません。

ヒエロニモ なに、お前の息子は殺されたのか？

絵描き はい。あれほど大事な息子を持った人はおりません。

ヒエロニモ お前の息子ほどだと？それはこの大地と同じくらい大きな嘘だ。私の息子のわずかな髪でさえ、お前の息子のものより千倍も重いぞ、その息子が殺されたのだ。

絵描き ああ、私には息子しかおりませんでした。

ヒエロニモ 私も、私もそうだ。だが私の息子は数千人にも値した——だが、そのことはもういい。ペドロ、ジェイクィーズ、中に入れ。イザベラも。この正直な男と私は、子供を奪われた二匹のライオンのようにこの恐ろしい庭をさまようから。入れ、早く。(イザベラ、ペドロ、ジェイクィーズ退場。絵描きとヒエロニモは座る) さあ、これからは真面目に話そう。お前の息子は殺されたのか？

絵描き はい。

ヒエロニモ 私の息子も同じだ。どのように感じた？狂ったりしなかったか？目の前に幻が見えなかったか？

絵描き はい、その通りです。

ヒエロニモ お前は絵描きか？涙、傷口、呻き、あるいは溜息を描くことができるか？このような木を描いてくれるか？

絵描き 私の絵のことはお聞きになったことがあると思います。私の名前はバザードです。

ヒエロニモ バザード、お前は本当に良い男だ。いいか？長廊下にいる私を

油絵で、くすんだ色で描いてくれ、そして今より5才若く、よいか？5年前に戻して、私は司法官だ。妻のイザベラが私の横に居て、息子のホレイショーに語りかけるような眼差しをしている、「あなたに神の祝福がありますように」と言っているような見つめ方だ。私の手は息子の頭に置かれている。わかったか、できるか？

絵描き はい、うまく書いてみせます。

ヒエロニモ いや、よく聞け。それからこの木、この木を書いてほしい。悲しい泣き声を描けるか？

絵描き そのようには描けます。

ヒエロニモ いや、本当に泣いているように書いてもらいたいのだ。だが、それはいい——悪者たちによって何度も刺され、この木にぶら下がっている若い男を書いてくれ。人殺しは描けるか？

絵描き はい、スペインの名高い悪人たちを書いた見本を持っておりますので。

ヒエロニモ もっと悪く、もっと悪くして描け。趣向を凝らして、髭はユダと同じ赤色にしろ、眉は突き出ている、必ずそのようにしろ。それから、何か荒々しい音が聞こえた後、シャツを着てガウンを抱えた私を登場させるのだ、手には松明を持たせて、剣をこのように立てて、「この音は何だ？だれがヒエロニモを呼んだのだ？」という言葉を添えろ。できるか？

絵描き はい。

ヒエロニモ その後私は庭の道を辿っていく、恐れた表情で、髪は逆立っている。どんよりした雲、月の光は無く、星の光は消え、風が吹き、鐘が鳴り、鼻の声、ヒキガエルの鳴く声、時計の針の音、そして時計が12時を告げる。それから、ついに——私は震えながら、吊るされて風に揺られるように動く男を見るのだ、私はすぐに紐を切って男を降ろす。松明の光で、それが私の息子ホレイショーだと気付く。そこで激しい感情、激しい感情の場面を描くのだ。「屋敷が燃える、屋敷が燃える」と叫ぶトロイの老いたプライアムに似せて私を描いてくれ、頭上で燃えている松明とともに

に。私は呪い、暴れ、泣き、狂い、落ち着いて、それから地獄を呪い、天に訴え、そして呆然となる。そのような感じだ。

絵描き　それで終わりですか？

ヒエロニモ　いや、終わりはない。最後は死と狂気だ。狂っている時が私は一番調子がよい。私は自分を素晴らしいと思い、大変なことをする。だが、理性が私を騙す——そこにあるのは苦痛と地獄だ。最後に私は人殺しのうちの一人のところへ行く。その男がヘクターのように強くても、こうやって切り裂いて、奴を引きずり回すのだ。

ヒエロニモは絵描きを叩きながら追いかけて中に入る。(1602年版)

(1592年版) 第 13 場　ヒエロニモ、手に本を持って登場。

ヒエロニモ　「復讐するは我にあり。」そうだ、天はいかなる悪行にも復讐する、また人殺しに罰を与えずにはおかない。では待て、ヒエロニモ、天の意志に従うのだ。人間がその時を決めることはできないのだから。「犯罪は常に犯罪によって身を守る。」しっかりと叩くのだ、ひどいことをされた時には。悪は次の悪を招く。決心してやれば、最悪でも死ぬだけだ。耐えて静かな暮らしをしようと思うものは、安らかな死を迎える。「もし運命の女神が惨めな者を助けるのなら、あなたは救済を得る。もし運命の女神が命を取るとしても、あなたには墓がある。」もし運命がお前の不幸を和らげてくれるのなら、健康を得て幸せになるだろう。もし運命が命を拒否するのなら、ヒエロニモ、それでも墓はあるのだ。どちらとも駄目なら、これを慰めにしよう——埋葬されない者には天が土をかけてくれる。そして結論は、私は彼の死を復讐する。だがどうやって？ 月並みな考えから衆人の目撃するところで行うのではなく、親切としてごまかせるような密かにかつ確かな手段を使うのだ。賢い人間は機会をつかむ、密かに、そしてしっかりと状況を時に合わせるのだ。だが、苦しい時には都合の良い機会は訪れない、そのため、いつでも復讐にふさわしいということではない。だから私はこのように休まらない心において休もう、ざわつく中でも

平穏を装い、奴らの悪事は知らないように見せよう、純真なふりをして私が全て水に流したと思わせるのだ。私、そして彼らもよく知っている、「純真さで悪を正すことはできない。」それに相手を脅しても無駄だ。野原に吹き付ける冬の嵐のように、奴らは貴族という立場で私を抑え込もうとするから。いや、いや、ヒエロニモ、お前の目でしっかりと観察しろ、思っているよりも優しい言葉をお前の舌に言わせるのだ、心には我慢させ、手は動かさず、帽子を脱いで膝を曲げるのだ、復讐の時と場所と方法を決めるまでは。(奥で音がする) どうした、この音は？何を騒いでいる？

家来登場。

家来 哀れな請願者たちが来ております。よろしければ、国王に彼らの訴えをどうしても伝えてほしいとのことで。

ヒエロニモ 訴えを私に取り次いでほしいというのか？こちらに連れてきなさい、その者たちに会おう。

三人の市民と老人 (バザルト) が登場。

市民1 (市民2と市民3に対して) いいか、学問と法に関する知識において彼に勝る弁護士はスペインにはいない。また、正義の追求において彼ほど労を惜しまない人はいないのだ。

ヒエロニモ こちらへ、私に願いのある方々。(傍白) 今は重々しい顔を見せねばならない、私も司法官になる前はこうやって弁護していたのだ。(市民たちに) さあ、どんな用件だ？

市民2 訴訟です。

ヒエロニモ 傷害か？

市民1 私は借金の訴訟です。

ヒエロニモ 場所を空けてくれ。

市民2 いえ、私のものは特別な書類が必要になる訴訟です。

市民3 私は契約が切れる前に借地人を立ち退かせたいのです。

ヒエロニモ どうしても私にお前たちの訴えを取り次いでほしいのか？

市民1 はい、これが申し立ての書類です。

市民2 これは私の証文です。

市民3 これが契約書です。

市民たちはヒエロニモに紙を渡す。

ヒエロニモ だが、あそこにいる可哀想な男はなぜ黙っているのだ、悲しい目をして天に向かって手を上げているが。

老人 閣下、私の訴えを少しでも知ったなら、好戦的なミュルミドンの兵士たちも心を動かされ、憐れみの涙でコルシカの岩を溶かすことになるでしょう。

ヒエロニモ さあ老人、話してくれ、訴えは何だ？

老人 できません。私の悲しみを辛い言葉で表すことができるのなら、激しい思いに動かされたこの訴えをこのようにインクで表したりしません。

ヒエロニモ これは何だ？（読む）「殺された息子のためのバザルトの請願」

老人 その通りです。

ヒエロニモ いや、これは私の殺された息子だ、ああ、私の息子、私の息子、私の息子ホレイショー！だが、私の息子であれお前の息子であれ、バザルトよ、満足するがいい。さあ、このハンカチを取って涙を拭くのだ。その間、みじめな私はお前の不幸の中に、死にかけている私の似姿を見るのだ。（血の付いたナプキンを取り出す）ああ、いや、これではない。ホレイショー、これはお前のものだ。お前の大事な血に浸したものだ、これは私がお前の死に復讐するという、お前の魂と私との約束の印なのだ。（さらに他の物を取り出す）さあ、これを、これも取りなさい。私の財布も。これも、これも全てお前のものだ、我らの不幸は全く同じなのだから。

市民1 ヒエロニモ様のあの思いやりを見ろ！

市民2 あの優しさは紳士である証拠だ。

ヒエロニモ 見ろ、見ろ、お前の恥を見るのだ、ヒエロニモ。息子を愛するこの父親を見るのだ。息子の死のために彼が伝える悲しみと哀れな嘆きをよく見るのだ。卑小な者においても愛がこのように強く働くのなら、身分

の低い者の心に愛がこのような感情を生み出すのなら、貧しい者たちにもこのように愛の力が表れるのならば、ヒエロニモ、荒れ狂う海が風と波でお前をひっくり返そうとする時、底の方では小さな波が動いているというのに、お前は海の上の波となって留まっているのか？ホレイシヨールの復讐を怠るとは、ヒエロニモ、お前は恥ずかしくないのか？この地上において正義が見つからないのなら、私は地獄へ降りていこう。苦しみながらプールの宮殿の薄暗い門を叩き、かつてヘラクレスがそうしたように、復讐の女神たちと苦しみを与える老婆たちを力づくで捕まえて、ロレンゾと他の者たちを拷問にかけるのだ。だが、三つの頭を持った番犬のケルベロスがああ泥土の岸辺への行く手を塞ぐといけないから、お前はトラキアの詩人オルフェウスのふりをするのだ。さあ、老人よ、私のオルフェウスになるのだ、ハーブの弾き方を知らないのだったら、私の息子を殺した者たちに復讐することをプロセルピナが認めるまで、お前のつらい心中の悲しみの低音を聞かせるがいい。その後は、奴らをこれ、このように切り裂き、私の歯で奴らの手足をばらばらに噛みちぎってやる。(紙を破る)

市民 1 ああ、私の申し立ての紙が！（ヒエロニモ、その後に市民たちが退場）

市民 2 私の証文を破かないでください！

ヒエロニモと市民たち登場。

市民 2 証文が！

市民 3 ああ、私の契約書が！10 ポンドもかかったのに、あなたは破ってしまった！

ヒエロニモ そんなはずはない、その紙を傷つけたりはしていない。一滴でも血が流れたというのなら見せてくれ。なぜ私が紙を殺したりできるか、さあ、追いかけて来い、捕まえられるか？（老人以外は全て退場）

ヒエロニモが再び登場するまでバザルトは舞台にとどまる。ヒエロニモはバザルトの顔を見ながら話す。

ヒエロニモ お前は地獄の底から戻ってきたのか、ホレイシヨール、この地上

において正義を求めるために、復讐を果たしていないと父に告げるために、長い嘆きのために光を失ってしまったイザベラの目からさらに涙を絞るために？戻れ、息子よ、アイアコスに嘆願するのだ、ここに正義はない。いい子だから、行くのだ、この地上から正義は追放されたのだから。ヒエロニモはお前の伴となろう。お前の母は人殺したちへの正当な復讐を求めて、正義を行うラダマンテウスに訴えている。

老人 ああ、この混乱したお話はなぜなのでしょう？

ヒエロニモ だが、私のホレイションを見せてくれ。愛しい子よ、死の暗黒の下、お前はなんと変わってしまったことか！プロセルピナはお前の若さに情けをかけず、お前の綺麗な赤い泉が冬によってこのように枯れることを許したのか？ホレイション、お前は父親より年老いてしまった。容赦ない運命だ、このようにお前の顔を変えとは！

老人 閣下、私はあなた様の息子ではありません。

ヒエロニモ 何、息子ではないのか？それならお前は復讐の神だ、誰もいない暗夜の王国から私を呼びにやってきたのだ、恐ろしいミノスと正しいラダマンテウスの前に出すために、そして怠慢でホレイションの死の復讐を果たそうとしないヒエロニモを苦しめるために。

老人 私は悲しんでいる者です、幽霊ではありません。殺された息子のための正当な裁きを求めて参りました。

ヒエロニモ ああ、今お前のことがわかった、今お前は息子と言ったな。お前は私の悲しみの似姿だ。お前の顔の中に私の悲しみを見ることが出来る。お前の目は涙で塞がり、頬は青白く、額には悩みが見え、ぶつぶつ言うその唇は悲しい言葉をつぶやいている、心が吹き付ける風のような溜息のために急に黙ったりしながら。この悲しみの全てはお前の息子のために生じたのだ。そして同じような悲しみを私は私の息子のために感じている。中へ入りなさい、老人よ、イザベルのところへ行くのだ。私の腕に寄りかかるがいい、私はお前を、お前は私を支えるのだ。そしてお前と私と彼女とで歌を歌おう、三つのパートを合わせるのだ、全て不協和音になる

のだが。コードのことを話すのはやめて、行くとしよう——ホレイショーは紐で殺されたのだから。(全員退場)

第14場 一方の扉からスペイン国王、カスティール公爵、ロレンゾ、バルサザー、ベル=インペリア、及び家来たちが登場。もう一方の扉から大公、ペドロ、従者たちが登場。

国王 弟よ、これはカスティール公爵に関わることなのだから、私のために大公に挨拶してくれ。

カスティール公爵 行ってまいります。

大公 ペドロ、前に出なさい。お前の甥のため、カスティール公爵に挨拶するのだ。

ペドロ わかりました。

国王 今からこのポルトガルの人たちに会うとしよう。我らと同様に、かつては彼らも西インド諸島の国王、そして支配者であったのだ。スペイン宮廷によく来られた、勇敢な大公、そしてお付きの立派な方々もようこそ。このように海を渡って来られたことの理由は知っています。あなた方の私に対する忠誠と並ではない友情がこれで分かりました。ここで皆に知らせておきましょう、私の姪はバルサザーとすでに婚約しました。またこちらからの提案に従って二人は明日結婚することになっていますので、私はあなたと家来の皆さんを歓待し、また彼ら二人の喜びと私たちの平和を受け入れます。言ってください、ポルトガルの方々、それでよろしいでしょうか？よいのなら、そう言ってください。反対するならばはっきりと言ってください。

大公 名高き国王、私はあなたが思われているように、疑心を持った家来たちや決心がつかない者たちと共に来たものではありません。彼らはあなた様の提案された条項に賛同して私を満足させた者たちです。私はあなた様の愛する姪、美しいベル=インペリアと私のバルサザーの結婚を祝うためにやってきました。お前、我が息子、こうやって生きてお前を見ることが出

来たのだから、王冠を取りなさい。これは彼女とお前に与えよう。私はこれから一人、ずっと祈りを捧げて生きることにする、天がこのような奇跡によってお前を生かしておいてくれたことを思いながら。(泣く)

国王 見なさい、弟よ、親としての情に動かされた大公を。さあ、大公、あなたのご心労に私も付き合います。このような気分には人の少ないところが良いでしょう。

大公 ここでも、あるいは陛下が勧められるところでも従います。

カスティール公爵とロレンゾ以外は全て退場。

カスティール公爵 待て、ロレンゾ、お前と話がしたい。あの王たちの歓待の様子を見たか？

ロレンゾ はい、父上、喜ばしいことです。

カスティール公爵 この会合の目的は知っているだろうな？

ロレンゾ バルサザーの愛する我が妹のため、そして約束された結婚を確かなものとするためです。

カスティール公爵 彼女はお前の妹だな？

ロレンゾ ベル＝インペリアですか？そうです、父上、この日が来ることを長く待ちわびていました。

カスティール公爵 お前の犯した間違いで彼女の幸せが妨害されるのは嫌だろう。

ロレンゾ ロレンゾがそのようなひどい過ちをすることは天が許しません。

カスティール公爵 ではロレンゾ、私の言うことを聞くのだ。お前、ロレンゾがヒエロニモをひどく扱い、陛下に対する彼の訴えをいつも遮って邪魔していると疑われている、そう噂されてもいるのだ。

ロレンゾ 私がですか？

カスティール公爵 いいか、息子よ、私自身もその話を聞いたのだ。悲しいことに、その時はお前の代わりに答えることが恥ずかしかった。お前は私の息子だが、ロレンゾ、ヒエロニモがその功績によってスペイン宮廷の皆に愛され、大事にされていることを知らないのか？我が兄である国王

の、ヒエロニモとその幸福に対する気配りを見なかったのか？ロレンゾ、もしお前が彼の訴えの邪魔をして、彼が国王に対してお前のことを責めたりしたら、このような集まりにおいて我々の名誉はどうなる？それに王たちの間で悪い評判になるではないか、ヒエロニモがお前のことを訴えたりしたら！話してくれ、正直に言うのだ、宮廷にあるこの噂の原因は何なのだ？

ロレンゾ 父上、何でも言う民衆たちの口を止めることはロレンゾにはできません。ちょっとした機会があれば水は漏れてゆきます。全ての人たちを長く満足させることができる人間などいないのです。

カスティール公爵 お前が彼とその嘆願から王を引き離そうと必死になっているのを私は見たのだ。

ロレンゾ 父上も、王の御前にはふさわしくない彼のあの狂乱した様を見たでしょう。私は彼の苦しみに同情して、優しい丁寧な言葉でそこから去るように促したのです。私の魂とあなた様に対してと同様に、ヒエロニモにも悪意は持っておりません。

カスティール公爵 息子よ、ではヒエロニモはお前のことを誤解しているのだな？

ロレンゾ はい、そうであると信じてください。しかし気の狂った哀れな男です、息子が殺されたなどと思って。彼にとって間違えるのはたやすいことです。ですが、誤解しているとしたら、彼、そして世間も納得するようにヒエロニモと私が仲直りしておくほうがよいでしょう。

カスティール公爵 ロレンゾ、そのようにしなさい。誰か、ヒエロニモを呼んでこい。(家来退場)

バルサザーとベル=インペリア登場。

バルサザー さあ、ベル=インペリア、あなたはバルサザーを満足させるもの、私の悲しみを癒すもの、そして私の幸せの主です。天はあなたが私のものになることを命じられたのですから、そのように曇った憂鬱な表情は退散させてください、太陽のように輝くあなたの目でその表情を追ひ払う

のです。あなたの目には私の希望、そして天上の美が映っています。

ベル=インペリア 私の表情は、始まったばかりで明るくならない私の恋にふさわしいものです。

バルサザー 新たに燃え上がる炎は朝の太陽のように燃えるはずです。

ベル=インペリア しかしあまりに早くてはいけません、熱も他のものも皆無くなってしまいますから。父上が来られましたわ。

バルサザー 休戦です、私の恋人、挨拶に行きます。

カスティール公爵 ようこそ、バルサザー様、よく来られました、勇敢な王子、このカスティールの安らぎを保証されるお方。ベル=インペリアもよく来た。調子はどうだ？そのように深刻な顔をして出迎えるとはどうしたのだ？安心するがいい、私は満足しているのだから。アンドレアが生きていた頃と今とは違う。あのことはもう忘れたし許している、それにお前はより素晴らしい恋人を与えられたのだ。バルサザーとヒエロニモがやってきた。彼と話をしよう。

ヒエロニモと家来登場。

ヒエロニモ 公爵様はどこですか？

家来 あちらです。

ヒエロニモ (傍白) そうか。やつらはどんな新しい企みを思いついたのだろう？何も喋らず、子羊のように穏やかになるのだ。私は復讐するのか？いや、私はその男ではない。

カスティール公爵 よく来た、ヒエロニモ。

ロレンゾ よく来た、ヒエロニモ。

バルサザー よく来た、ヒエロニモ。

ヒエロニモ 皆様方、ホレイショーに代わって礼を申します。

カスティール公爵 ヒエロニモ、お前と話をするために呼びにやった理由はこれなのだ。

ヒエロニモ え、これだけですか。それでは失礼します。ありがとうございます。(退出しようとする)

カスティール公爵 待て、ヒエロニモ。息子よ、彼を呼び留めろ。

ロレンゾ ヒエロニモ、父上がお前と話したいと言っている。

ヒエロニモ 私ですか？もう終わったと思っていました。

ロレンゾ まだだ。(傍白) そうなら良かったのだが。

カスティール公爵 ヒエロニモ、国王に近づけないことでお前が我が息子のために苦しんでおり、訴えを息子が邪魔しているとお前が言っていると聞いたのだ。

ヒエロニモ え、それは可哀そうなことですね？

カスティール公爵 ヒエロニモ、そのようにお前が恨む理由がなければと思っている、それにお前のように立派な者が息子を疑う理由があるということはお前にとっても嫌なはずだ——私がお前のことを良く思っているということを考えるならば。

ヒエロニモ あなたの息子様のロレンゾが？あの高貴なの方が？スペインの希望、私のあの立派な友人が？私をその者たちと決闘させてください、もし相手が応じるなら。(剣を抜く) そのように言う男と直接対決しましょう。それは私を愛していない者、そして閣下をひどく憎んでいる者が流した中傷でしょう。私の息子をととても愛してくれたロレンゾ様が私の訴えの邪魔をしたりするなどと私が疑うでしょうか？恥ずかしくなります、そのようなことが言われているとは。

ロレンゾ ヒエロニモ、私はお前に恨む理由など与えていない。

ヒエロニモ はい、そうであると知っております。

カスティール公爵 では、これでよいだろう。他の人たちも納得するように、私、カスティール公爵シプリアンの古い屋敷を訪ねてくれ、その際は私と我が息子、そして屋敷を使えばいい。だが、ここで、バルサザー王子と私の前で互いを抱擁して友となるのだ。

ヒエロニモ (ロレンゾを抱きしめる) はい、閣下、そうしましょう。「友」と言いましたね？皆さんと友になりましょう。(ロレンゾに) 特にあなた様、素晴らしいあなた様とは。いろんな理由がありますから、私たちは友

人になった方が良いのです。世間は疑り深いですし、我らが思いもしないことを考えたりしますから。

バルサザー これで仲直りですね、ヒエロニモ。

ロレンゾ こうして、昔の恨みは忘れたと願いたいのだが。

ヒエロニモ そうでなければ駄目でしょう。

カスティール公爵 私が呼んだら来てくれ、ヒエロニモ。今日は私たちについて来てくれ。

ヒエロニモ 仰せに従います。(ヒエロニモ以外全て退場) ああ！この調子でいかねば。「見ろ！いつもより私を労わる者が私を裏切った者、あるいは裏切ろうとしている。」(退場)

第 15 場 アンドレアの亡霊と復讐の神登場。

アンドレアの亡霊 起きろ、エリクト、ケルペロスよ、起きろ！ブルートに願うのだ、優しいプロセルピナ！戦え、アケロンとエレバス！地獄のステュクス川やフレグトンで [1 行欠落] 火の池へと連れていく渡し守のカロンも、哀れなアンドレアが見ているこのような恐ろしい光景は見えていないのだ！復讐の神、起きろ！

復讐の神 起きろ？なぜだ？

アンドレアの亡霊 起きろ、復讐の神、分別がないぞ！眠りを追い払え！眠らずに見ているように言われたではないか？

復讐の神 安心しろ、私の邪魔をするな。

アンドレアの亡霊 起きろ、復讐の神、地獄においても愛が同様に力と権威を持つのなら！ヒエロニモはロレンゾと仲間になった、そして我々の復讐への道を阻んでいる。起きろ、復讐の神、さもないと我々は悲しみに押し潰されるのだ！

復讐の神 このように人間は夢を判断の土台にする。安心するがいい、アンドレア。眠ってはいるが、私の心は彼らの魂を捕らえようとしているのだ。哀れなヒエロニモが息子ホレイショーのことを忘れられないというこ

とで十分だろう。それに、眠っていても復讐の神は死んではない、混乱した中で安らかなふりをしているのだ、そして眠りは世間でよく使われる手だ。見るのだ、復讐の神がどのように眠っていたか、アンドレア。そして運命に支配されるとはどのようなものか想像するがいい。

黙劇登場（松明を持った二人と婚姻の神ハイメンが登場。身振りを行って全員退場する）。

アンドレアの亡霊 起きろ、復讐の神、この見世物に隠されている意味を教えてください。

復讐の神 最初に来た二人は昼の太陽のように明るく輝いた婚姻の松明を持っていた。だがその後、黄色い服の上に黒い衣を着た婚姻の神が急いでやってきて松明の火を吹き消し、そこに血をかけた。そのように事態が続くのが気に入らないというように。

アンドレアの亡霊 十分だ。お前の言うことの意味はわかった。恋人の嘆きをそのままにはしておかないあなた、そして地獄の権力者たちに礼を言う。休んでくれ、私は座って残りを見るから。

復讐の神 では文句を言うな、お前の要求は満たされるのだから。

アンドレアの亡霊と復讐の神はそのまま残る。

第4幕

第1場 ベル=インペリアとヒエロニモ登場。

ベル=インペリア これがあなたのホレイショーに対する愛情なのですか？
これがあなたの装っていた優しさですか？あなたの止まることのない涙の結果がこれなのですか？ヒエロニモ、これまで人々を疲れさせていたあなたの狂態、あなたの訴え、そしてあなたの深い嘆きはこのようなものなのですか？情のない父親！欺瞞に満ちた世の中！どのような言い訳を持ってあなたはやってきたのですか？どのような〔以下欠落〕この不名誉と人々

の憎しみから、理由もなく殺されたと私の手紙が示し、あなたもそのように信じた彼の死と命をこのように無視するなんて！ヒエロニモ、お願いです、ヒエロニモ、息子に対するそのような不人情の例として後世に名を残さないでください。そのような子供たちの不幸な母親たち！しかし恐ろしいのは父親、愛情と手間をかけて育て、不注意で失くしてしまった子供の死をこんなに早く忘れるなんて！私はあなたと比べれば他人ですが、彼らの死をずっと願うのと同じくらい彼の命を愛しています。またこのように見かけでは我慢していますが、彼の死が私によって復讐されずにすむことはありません。ここで、天と地の前で誓います——あなたが本来持つべき愛をないがしろにしてあきらめてしまい、何も策を練らないのだったら、酷いやり方で彼を破滅させた者たちの憎い魂を私が地獄に送りこみます。

ヒエロニモ 今、話してくれたような復讐をベル=インペリア様が誓ってくださるとは本当でしょうか？それならば、天は我々の目的に力を貸してくれます。天使たちは皆、あの呪われた人殺したちへの復讐を座って懇願してくれます。あれは真実でした、今わかりました。あなたの書かれた手紙を私は見つけ、その手紙によってホレイショーがなぜ死んだかを知りました。お許しを、ベル=インペリア様、許してください、恐れと用心のため私がそれを信じなかったことを。また、私が忘れてしまって彼の死を復讐しないことにしたとは思わないでください。もしあなたが同意して下さり、私の決意を秘密にしてくださるなら、ここで私は誓います——私は理由もなく私の息子を殺した者たちをいつ殺すか、まもなく決めます。

ベル=インペリア ヒエロニモ、あなたに賛成し、秘密を守ります。あなたの助けになることでしたらどんなことでも協力して、あなたと共にホレイショーの死の復讐をします。

ヒエロニモ それでは、私がどんなことを考えたとしても手伝ってくださるようお願いします。策は既にこの頭の中にあるのです。彼らがやってきました。

バルサザーとロレンゾ登場。

バルサザー 何だ、ヒエロニモ？ベル＝インペリアに言い寄っているのか？

ヒエロニモ はい、王子。私の心の内を知っていただけるように思いました。ですが彼女の心はあなた様のものです。

ロレンゾ ヒエロニモ、今こそお前に頼みたい事があるのだ。

ヒエロニモ 私に頼むのですか？ええ、もちろんけっこうです、あなた様は私にそうする理由を与えておりますので。

バルサザー 大使をもてなした時に国王のために出し物を用意してくれたでしょう。あれと同じようなものか、そういう面白い見世物を最初の晩の余興として用意してもらえのなら皆喜ぶと思うのですが。

ヒエロニモ それだけですか？

バルサザー ええ、それだけです。

ヒエロニモ では、ふさわしいものを用意しましょう、もう言わないでください。若い頃、私は無駄な劇作に熱中していました。それは作家たちの役には立ちませんでした、世間の人々をととても喜ばせました。

ロレンゾ それで？

ヒエロニモ つまり、こういうことです、お二方——大分急かされておりますが——トレドで勉強していた頃に悲劇を書いたのですが、これがそうです。(本を見せる) 長い間忘れておりましたが、先日見つけました。あなた方がこの劇で役者になっていただけないかと——つまり、それぞれの役を演じていただきたいのです。お集まりの方々にとってはとても素晴らしい、そして楽しいものになることと思います。

バルサザー なに、悲劇を演じさせるのか？

ヒエロニモ ええ、ネロはそれが不名誉だとは思いませんでした。国王や皇帝も劇において自らの才を披露することに喜びを感じていました。

ロレンゾ いや、怒るな、ヒエロニモ。王子は聞いただけだ。

バルサザー ヒエロニモ、真剣にそう願っているのなら、加わりましょう。

ロレンゾ では私も。

ヒエロニモ ではロレンゾ様、どうかベル＝インペリア様にも仲間に入って

いただけるか、聞いてもらえませんか？女性が出なければ劇とは言えませんから。

ベル＝インベリア 頼まなくても大丈夫です、ヒエロニモ。私はあなたの劇に出してもらわなければいけないのですから。

ヒエロニモ それはよかったです。皆様にお伝えしておきますが、この劇は話す内容を理解している紳士たちと学者によって演じられるように作られています。

バルサザー 今回は台詞の話し方を心得ている王子と宮廷人によって演じられるのです。この国の慣習通りに劇のあらすじを教えてくれるならばですが。

ヒエロニモ わかりやすく説明しましょう。スペインの歴史書にロードス島の騎士について書かれてあります。彼はパーセダというイタリアの女性と婚約し、ついに結婚します。彼女の美しさは見た人全てを虜にしましたが、特に結婚式の主賓だったスレイマーンを魅了しました。スレイマーンは様々な手段を使ってパーセダの愛を得ようとしていましたが駄目でした。そこで彼は自分が大事にしていたパシャの一人である友人に自分の愛情を打ち明けました。このパシャは長い間彼女を説得しましたが、彼女の夫であるロードス島の騎士の死をもって以外は彼女を得ることはできないと悟り、姦計によって彼を即座に殺します。パーセダは大きな憎しみに駆られて、この仕返しにスレイマーンを殺します。そしてパシャの圧力から逃れるために自らを刺しました。これがその悲劇です。

ロレンゾ 素晴らしいな。

ベル＝インベリア ですがヒエロニモ、そのパシャはどうなったのですか？

ヒエロニモ それはこうです——自分の悪行を後悔して、山の頂まで駆けていき首を吊りました。

バルサザー だが、その役は私たちの誰が演じるのだ？

ヒエロニモ 私が演じます、大丈夫です。私が殺人犯を演じましょう、既にその役のことは考えておりますので。

バルサザー それで私は何を？

ヒエロニモ トルコ皇帝のスレイマーンです。

ロレンゾ では私は？

ヒエロニモ ロードス島の騎士エラスタスです。

ベル=インペリア 私は？

ヒエロニモ 貞潔で決意を持ったパーセダをお願いします。皆さん、これは劇の要約です、それぞれの役を確認して出番が来たら演じてください。あなたはトルコの帽子と黒い口髭、あと偃月刀を用意してください。(バルサザーに紙を渡す) あなたはロードス島の騎士に合うような十字架を持ってきてください。(ロレンゾに紙を渡す) そしてあなた様は(ベル=インペリアに紙を渡す) フィービカ花の女神フローラ、もしくは狩の女神のような恰好をしてください。あなた様のご判断で最もふさわしいものを選んでください。私も自分の衣装を用意します。大公が送ってくださった身代金を使って準備して、この悲劇を上演します。ヒエロニモは奮発して芝居を飾りたてたと人々が言うようにしたいです。

バルサザー ヒエロニモ、喜劇の方が良いと思うのだが。

ヒエロニモ 喜劇ですか？いや、喜劇は身分の低い者たちに合うもの、国王の御一行にご覧いただくには高尚な悲劇が必要です。気高い悲劇——王にふさわしく、また軽々しいものではない、しっかりとした内容のものです。皆様、この劇は最初の夜の余興としてふさわしいように演じなければいけません。イタリアの悲劇役者たちは頭が良く、1時間りハーサルをすればどんなものでも演じてしまうそうです。

ロレンゾ そうだろう、フランスの悲劇俳優たちがそのようにやっていたのをパリで見た。

ヒエロニモ パリですか？よく思い出されました。もう一つ、やることがあります。

バルサザー 何だ、ヒエロニモ？何も忘れないようにしないと。

ヒエロニモ それぞれ知らない言語で役を演じるのです、そうすれば多彩な

劇となるでしょう。(バルサザーに) あなたはラテン語で、私はギリシャ語で、(ロレンゾに) あなたはイタリア語で、そしてベル=インペリア様はフランス語を学んでいるそうですので、台詞は全て宮廷風のフランス語で話してもらいましょう。

ベル=インペリア では私の話す力を試すのですね。

バルサザー しかしそれでは全く混乱してしまうし、言っていることが分かりにくくなるでしょう。

ヒエロニモ それで結構です。劇の最後で展開を説明しておけば大丈夫ですから。私の話、そしてカーテンの後ろに隠しておく珍しい、また素晴らしい見世物で劇の内容を明らかにします。全て一幕で終わるようにします、長くなっては面白くないですから。

バルサザー (ロレンゾに傍白) どう思う？

ロレンゾ (バルサザーに傍白) ヒエロニモの機嫌を取っておかねばいけませんでしょう。

バルサザー では、ヒエロニモ、またすぐに会いましょう。

ヒエロニモ この仕事に加わっていただけるのですね？

ロレンゾ そうだ。(ヒエロニモ以外全て退場)

ヒエロニモ さあ、混乱の中で天の神々が引き起こすバビロンの崩壊がこれから見られるぞ。もし世間がこの悲劇を気に入らないのなら、老いたヒエロニモの運は辛いものになる。(退場)

第 2 場 イザベラが剣を持って登場。

イザベラ もう何も言わないで！ 恐ろしい人殺したち！ 信仰と情によっても国王を正義と同情へと動かすことができないのだから、私の愛する息子を彼らがこうやって殺したこの場所で、私は私自身に復讐しよう。(東屋の木を切る) この不吉な、死をもたらした松の枝を、大枝を切り落そう。切り落として、イザベラ、それから枝を切り裂いて、全ての元となった木の根を焼いてしまおう。根、茎、幹、枝、小枝、花、葉、そしてこの庭にあ

るどんな草も残しはしません。私の不幸をもたらした呪われた陰謀の地、この庭に今後果実がなることがありませんように、この土地は不毛に、そしてここを耕そうと思うものは不幸になりますように！汚れた空気と混ざり合った東風がここの草と若枝を枯れさせ、大地は蛇によって苦しめられ、通りすがりの者たちは感染するのを恐れて離れて立ち、庭を見ながら言う、「あそこでイザベラの息子が殺され、死んだ。」そう、ここで彼は死んだのだから、ここで私は彼を抱きしめる。傷ついた息子の亡霊が、自分の死の復讐を實行しない私に復讐を求めているのが見える。ヒエロニモ、早く息子に会いに行って——悲しみと絶望に押された私は、ホレイショールがラダマンテウスに懇願するのを聞きに行きます。急いで、ヒエロニモ、憎しみによって彼の命を奪った者たちの死をあなたが求めていることを弁解するのです。いや、あなたは彼らの死を引き延ばし、あなたの高貴な息子を殺した者たちを許している。ただ私だけが当てもなく動いているのです。この木がもう実を付けないう祈ります、私の子宮も彼のことで呪われますように。この短剣で私の胸を傷つけます（彼女は胸を刺す）、ホレイショールに乳を与えたこの不運な胸を。（死ぬ）

第3場 ヒエロニモ登場。幕を取り付けている。カスティール公爵登場。

カスティール公爵 どうした、ヒエロニモ、他の者はどこに行ったのだ、お前独りでこのように準備をして？

ヒエロニモ 全てうまく進むようにしませんが作者の信用に関わりますから。閣下、すみませんがこの劇の台本を国王に渡していただけないでしょうか？これが我々の出し物のあらすじです。（彼に本を渡す）

カスティール公爵 わかった、ヒエロニモ。

ヒエロニモ もう一つお願いがあるのですが。

カスティール公爵 何だ？

ヒエロニモ よろしければ、皆様が広間に入られる時に私に鍵を投げてほしいのです。

カスティール公爵 わかった、ヒエロニモ。

ヒエロニモ 準備はできましたか、バルサザー様？王の座られる椅子とクッションを持ってきてください。

バルサザーが椅子をもって登場。

ありがとうございます、バルサザー様。板を架けてください。場面は「ロードス島」です。髭は付けたのですね？

バルサザー 一つは付けました、もう一つは今持っています。

ヒエロニモ 急いでください、遅いですよ。(バルサザー退場) よく考えろ、ヒエロニモ。知恵を働かせて、息子を殺されたという過去の仕打ちを思うのだ。そして最後に大事なこのこと——ホレイションの母でありお前の最愛の妻であったイザベルが彼のことで悲しみに打ちのめされて自殺したということを。恐ろしい復讐の策は用意できた。行こう、ヒエロニモ、復讐を果たすのだ、あと必要なのは復讐を演じることだけなのだから。(退場)

第4場 スペイン国王、ポルトガル大公、カスティール公爵、及び従者たち登場。

国王 大公、これからトルコの皇帝スレイマーンの悲劇を見ましょう、王子もご厚意により演じられます、あと私の甥のロレンゾと姪もです。

大公 ベル=インペリアもですか？

国王 そうです、それに司法官のヒエロニモが出ます。彼の願いに応じて彼らは演じることになったのです。これがスペイン宮廷における余興になります。弟よ、お前は台本係になってくれ。これが彼らが見せる劇の要約だ。(本をカスティール公爵に渡す)

皆様、数か国語で書かれているこのヒエロニモの劇は、一般の読者に分かりやすいように英語で書かれてあります。

バルサザー、ベル=インペリア、ヒエロニモ登場。

バルサザー 「バシャよ、こうしてロードス島が我らのものになったことを天の神々に、そして我らの聖なる予言者である聖マハマッドに感謝しよ

う。このスレイマーンが与えうるもの、あるいはお前の望むもの全てをお前は与えられるだろう。だが、ロードス島を征服したことよりも、この美しいキリスト教徒の妖精、幸福の光であるパーセダを捕らえたことがお前の手柄だ。彼女の目は強い磁石のごとく軍人であるスレイマーンの心を引き付ける。」

国王 見なさい、大公、皇帝スレイマーンを演じているのがあなたの息子のバルサザーです。恋の感情をうまく演じていますね。

大公 ベル=インペリアに教えてもらったのでしょうか。

カスティール公爵 彼の心が完全にベル=インペリアに向かっているからです。

ヒエロニモ 「大地が与える全ての喜びが陛下のもとに訪れますように。」

バルサザー 「パーセダの愛なくしては、地上は何の喜びも与えてくれない。」

ヒエロニモ 「ではパーセダを陛下に仕えさせましょう。」

バルサザー 「彼女ではなく私が彼女に仕えよう。彼女の目の力に引き付けられて私は降伏するのだ。だが我が友人であるロードス島の騎士をこちらに連れてきてくれ。私の命よりも大事なエラストを私の愛するパーセダに会わせよう。」

エラスト役のロレンゾが登場。

国王 ロレンゾが出てきた。あらすじを見て教えてくれ、彼は何の役を演じているのだ？

ベル=インペリア 「ああ、私のエラスト、パーセダのもとへよく来られました。」

ロレンゾ 「あなたが生きていてくれてエラストは本当に幸せです。エラストのこの喜びに比べれば、ロードス島を失ったことは何でもない。私のパーセダが生きているから私は生き延びられます。」

バルサザー (ヒエロニモに傍白) 「ああ、パシャ、エラストと私の心の主である美しいパーセダは愛し合っている。」

ヒエロニモ （バルサザーに傍白）「偉大なるスレイマーン、エラストを殺すのです、そうすればパーセダはすぐにあなた様のものに。」

バルサザー 「エラストは私の友人だ。それに彼が生きている間、パーセダが他の者を愛することはない。」

ヒエロニモ 「エラストが生きながらえてスレイマーンを悲しませてはいけません。」

バルサザー 「私にとってエラストは大事なのだ。」

ヒエロニモ 「ですが、あなた様のライバルであるのなら殺しましょう。」

バルサザー 「よし、彼には死んでもらおう、愛がそう命じるのだ。だがエラストが死ぬとは悲しいことだ。」

ヒエロニモ （ロレンゾに近づく）「エラスト、スレイマーンがあなたにこのように挨拶してその御意向を伝えるよう言われました——あなたをこうします、とのことです。」（ロレンゾを刺す）

ベル=インペリア 「エラスト！見てください、スレイマーン、エラストが殺されました。」

バルサザー 「だが、あなたを慰めるスレイマーンが生きています。美の女王、愛することを止めないでください。優しい目で私の嘆きを見てください、パーセダの嘆きによって解放されなければパーセダの美しさによって増すことになる男の嘆きを。」

ベル=インペリア 「暴君、無駄な願いを言うのはやめなさい。私の耳はあなたの嘆きを容赦しません、罪のない騎士であった私のエラストを殺した者が非情で下劣だったのと同じように。あなたは権力を使って私に命じようと思っており、パーセダはそれに従います。ですが、私に手段があるのなら、あなた——卑怯者である王子に裏切りの復讐をこのように行います（王子を刺す）、そして私自身にもこうやって復讐しましょう。（自らを刺す）

国王 上出来だ、司法官。素晴らしい芝居だった。

ヒエロニモ ベル=インペリア様がパーセダをうまく演じられました。

大公 これがもし本当であったなら、ベル=インペリア、あなたは我が息子にとってさらに良い妻と言えるだろう。

国王 それでヒエロニモはこの後どうするのか？

ヒエロニモ はい、ヒエロニモはこのようになります。様々な言語で話すのはこれで終わりにして、我が国の言葉で締めくくります。おそらくあなたがたは——それは間違っているのですが——これが作り物の芝居で、全ての悲劇役者たちと同様に、今日はアイアスカローマの貴族の死を演じて芝居として死にますが、その後すぐに起き上がり生き返って次の日のお客様を楽しませると思っておられるでしょう。そうではないのです、王族の皆様。私はヒエロニモ、不運な息子を持った、希望を失った父親です。劇の不出来について謝るのではなく、私の舌は息子の最期について話をします。皆さんは私の言っていることの証拠を求められているようですね。私にこのようなことをさせた理由をご覧ください。

彼は幕を引いて息子の死体を見せる。

この私の出し物を見てください、この光景をよく見てください。ここに私の希望があった、そしてここで私の希望は終わった。ここに私の心はあった、そしてここで私の心は殺された。ここに私の宝はあった、そしてここで私の宝は失われた。ここに私の幸福はあった、そしてここで私の幸福は奪われた。希望、心、宝、喜び、幸福——全て息子とともになくなり、駄目になって、死んで、そう、滅びました。この傷口から、私に命を与えた呼吸も出て行ってしまいました。この致命的な傷を与えた者たちが私を殺したのです。原因は愛でした、そこから死をもたらす憎しみが生まれました。憎しみを持ったのはロレンゾとバルサザー、そして私の息子はベル=インペリアを愛していました。しかし、呪われた犯罪を覆う夜が漆黒の静けさによってその反逆者たちの悪事を隠し、彼らは時を選んで私の庭で私の息子、私の最愛のホレイションを襲いました。あそこで無残にも、暗黒の夜に彼らが私の子を惨殺し、青白く薄暗く残酷な死へと導きました。彼は叫びました。私は彼の恐ろしい叫び声が空に響くのを聞いたのです——

今でも聞こえるようです。大急ぎで私はその声のする方へ行きましたが、そこで私はご覧のとおり、何か所か突き刺されて殺された息子を発見したのです。この見世物のことで私が嘆いていると思いますか？話してください、ポルトガルの方、あなたの喪失は私のものと似ております。もしあなたがバルサザーを思って泣くのなら、私がホレイショーのことを思って泣くのも自然でしょう。（カステール公爵に）そして閣下、私が和解したあなたの息子は誰にも疑われていない、また見られていないと思って、「神様が狂ったヒエロニモを治しますように」と言って私が狂ったと罵っておりましたが、あなた様はこの私たちの劇の結末を耐えられるでしょうか？そして、血のついたこのハンカチを見てください、（血の付いた布を取り出す）これはホレイショーが死んだ時に、彼の傷から流れる血に私が泣きながら浸したものです。見てください、これを私は形見として持っていました。血を求める私の心からこれが離れることはなく、この呪われた殺人者たちに復讐するという誓いを思い起こさせました。それも今は実行され、私の心は満足しました。この目的のために私はパシヤの役になったのです、ロレンゾの命に復讐できるように。そのために彼は役を割り当てられ、ロードス島の騎士を演じることになったのです、私が都合よく彼を殺すことができるように。大公、バルサザー、あなたの息子はスレイマーンになり、パーセダを演じたベル=インペリアによって殺されましたが、彼がその悲劇の役に割り当てられたのは、彼女が敵である彼を殺すためだったのです。可哀そうなベル=インペリアはそこで彼女の役柄から脱線してしまいました。物語では彼女は死ぬことになっていたのですが、私は彼女のことを気遣って、彼女の結末は別の形にしておいたのです。しかし、彼らが憎悪していたホレイショーに対する愛情から、彼女はあのような最期を選びました。そして皆さん、今こそヒエロニモをみてください、この悲劇の作者そして役者である私を（彼は手にローブを持っている）、手にはその最後の運命を握りしめて、先に行った役者と同じくらいしっかりと自分の役を終わりにします。紳士の皆様、このように私は私の劇を終わら

せまず、もう何も言わせないでください、何も言うことはありません。

彼は走って行って首を吊ろうとする。

国王 聞いたか、大公！ヒエロニモを取り押さえろ！弟、私の甥、お前の息子は殺されたのだ！

大公 我々は騙された！バルサザーは殺された！ドアを壊せ、走ってヒエロニモを止めるのだ！（従者たちは中に入ってヒエロニモを捕らえる）ヒエロニモ、この出来事について王に話すのだ。我が名誉にかけて、お前に危害は加えないから。

ヒエロニモ 大公、私の命はあなたには預けません、私の命は今日私の息子に捧げてしまったのです。憎い奴だ、死ぬ決心をしている者をなぜ止めるのだ？

国王 話せ、反逆者！忌まわしい、血に染まった人殺し、話せ！こうやって捕まえたのだから、しゃべらせてみせる。なぜこのような理不尽な事をしたのだ？

大公 なぜ、私のバルサザーを殺したのだ？

カスティール公爵 なぜ、私の子供たちをこのように無残に殺したのだ？

(1592年版)ヒエロニモ ああ、素晴らしい言葉ですね！あなた方にとって、あなたの子供、またあなたの子供、そしてあなたの子供が大事だったように、私にとってホレイショーは大事だったのです。罪のない私の息子はロレンゾによって殺されました、そしてロレンゾとバルサザーの死によってついに私は復讐を完全に果たしました。彼らの魂に天の神々がさらに大きな苦しみを与えますように。

カスティール公爵 だが、お前の共犯者は誰だったのだ？

大公 それはあなたの娘のベル＝インペリアだ、彼女の手によって私のバルサザーは殺されたのだから。彼女が息子を刺すところを私は見た。

国王（ヒエロニモに）なぜお前はしゃべらないのだ？

ヒエロニモ 無害な沈黙よりも小さな自由を王が与えられるでしょうか？私にその自由を与えてください。私は何も言えないし言わない、それで十分

でしょう。

国王 拷問の道具を持って来い！反逆者め、必ず話させてやるぞ。

ヒエロニモ ええ、あの方の哀れな息子が私のホレイシヨを殺した時にそうしたように、拷問にかければいいですよ。しかし、守ると誓った秘密を私に言わせることは決してできません。ですから、どんなに脅されても私は彼らの死を喜び、彼らに復讐したことに満足しています。まずは私の舌を受け取りなさい、その後は私の心臓を取るがいい。(1592年版)

(1602年版) ヒエロニモ ですが、確かに皆死んでいますかね？

カスティール公爵 それは確かだ、見下げた奴め。

ヒエロニモ そしてあなたの息子も？

大公 そうだ、皆死んでしまった、誰も生き残っていない。

ヒエロニモ 構いませんよ。さあ、我らは友になりましょう。一緒に頭を並べましょう。この縄なら全員でも大丈夫ですよ。

大公 忌まわしい悪魔、居直るのか！

ヒエロニモ 居直る、ですか？それがなぜおかしいのですか？いいですか、大公、今日私は復讐を見届けました。その光景を見た私は、これまでスペインの王位に就いた君主たちよりも誇らしく感じているのです。たとえ私が星の数ほどの命を持っていたとしても、またそれと同じ数の天国に行けたとしても、あなたがこの赤い血だまりに立つのを見れないのなら、私はその命を全て捨てます、私の魂と共に。

カスティール公爵 言え！お前の共犯者は誰だったのだ？

大公 それはあなたの娘のベル=インペリアだ、彼女の手によって私のバルサザーは殺されたのだから。彼女が息子を刺すところを私は見た。

ヒエロニモ ああ、素晴らしい言葉ですね！あなた方にとって、あなたの子供、またあなたの子供、そしてあなたの子供が大事だったように、私にとってホレイシヨは大事だったのです。罪のない私の息子はロレンゾによって殺されました、そしてロレンゾとバルサザーの死によってついに私は復讐を完全に果たしました。彼らの魂に天の神々がさらに大きな苦しみを

与えますように。私は復讐に慣れてしまって、十分な軽蔑を持って死を見ることが出来ないのです。

国王 何、私を馬鹿にしているのか！拷問の道具を持って来い！

ヒエロニモ さあ、さあ、さあ、そのうち私があなたを拷問にかけますから。(大公に) あなたには息子がいましたよね、その息子さんは(カスティール公爵に) あなたの娘さんと結婚するはずだったのですよね？あなたには息子もいましたね、我が国王の甥でしたが。あの方は傲慢でしたかでした。もし生きていたら、スペインの王冠を戴いていたかもしれませんね。そう思います、そして彼を殺したのが私です。この手を見てください、この手で彼の心臓を刺したのです、この手を見えますか？ホレイシヨーのために——もしご存じならばですが、彼らがその父の庭で吊るした若者です、(大公に) あなたの勇敢な息子を降参させた男、(カスティールに) あなたのより強い息子によって捕まえられたのですが。

大公 駄目になってしまえ、私の感覚よ、これ以上聞くことはできない。

国王 落ちろ、天よ、その悲しい残骸で私を覆ってくれ。

カスティール公爵 暗雲でこの世界全てを包むのだ。

ヒエロニモ 私が演じた芝居に拍手します。「もう私の手を動かさずにすみませうように。」まずは私の舌を受け取りなさい、その後は私の心臓を取るのがいい。(1602年版)

彼は自分の舌を噛み切って吐き出す。

国王 なんという恐ろしい決意だ！見ろ、大公、あの男は私の求めるとおりに話すよりは、舌を噛み切ることを選んだのだ。

カスティール公爵 だが、誓くことはできるでしょう。

国王 もしそれでも私の思うとおりにしないのなら、これまで考えられた中でも一番残酷な処刑の方法を考えよう。

ヒエロニモはペンを削るためのナイフを要求する仕草をする。

カスティール公爵 ペンを削るナイフを欲しがっています。

大公 これを使え、必ず真実を書くのだぞ。

ヒエロニモはナイフで公爵を刺し、続けて自分も刺して死ぬ。

国王 弟を守れ！ヒエロニモを止めろ！このような恐ろしい行為を聞いた時代がこれまでであったであろうか？私の弟、そして私の亡き後の後継者としてスペインが期待していた人が——。弟の死体を運び出せ、我が愛する弟の死を弔うのだ。何が起ころうとも彼を埋葬しよう。私は彼に近い、最も近親の者、そして最後の者なのだ。

大公 ペドロ、私にも同様のことをしてほしい。時ならず殺された不運な我が息子を運んで、私を彼と共に、彼を悲しむ私と共に、無人の船のメインマストの上に置いてほしい。私は風と波によってスキュラの住んでいる唸り声をあげる荒々しい入江へ、あるいはアケロン川の忌まわしい水辺へと運ばれていき、愛すべき私のバルサザーの喪失を嘆くのだ。スペインにはポルトガル人が安らげる所はない。

トランペットが葬送の曲を演奏し、スペイン国王がカスティール公爵の遺体に従って悲しみながら退場。ポルトガル大公は息子の遺体を抱いて退場する。(全員退場)

第5場 アンドレアの亡霊と復讐の神

アンドレアの亡霊 こうして今、私の願いの結果がもたらされ、私の望みは血と悲しみによって達せられた。ホレイショーは彼の父の東屋で殺され、悪いサーベリンはペドリングーノによって殺され、嘘つきのペドリングーノは巧妙な策で絞首刑になり、美しいイザベラは自殺し、王子バルサザーはベル=インペリアに刺され、カスティール公爵とその邪悪な息子は年老いたヒエロニモに殺され、私のベル=インペリアはダイドーと同じように死に、善良なヒエロニモは自らを殺した。これらの光景は私の魂を喜ばせる。これから私は美しいプロセルピナのところへ行って、私の友人たちに喜んで付き添えるよう、また私の敵の者たちに公正かつ厳しい復讐を与えられるようお願いしよう。私の友人のホレイショーは、終わることのない戦争が行われているあの野原に導いていこう。美しいイザベラは、泣い

ているが痛みを感じることは決してない哀れな人たちのところへと導いていこう。私のベル=インペリアは処女たちと美しい女王が持つ喜びへと導いていこう。ヒエロニモは、永遠の日々に甘い喜びを与えながらオルフェウスが演奏している場所へと導いていこう。だが、教えてくれ、復讐の神よ、お前に手伝ってもらわなければいけない——残りの者たちには私の憎しみをどのように示せばよいだろうか？

復讐の神 この手によって、復讐の女神たち、怪物、そして苦しみが待つ地獄の奥底へと投げ込もう。

アンドレアの亡霊 では、やさしい復讐の神、私の願いはこの通りだ——私が裁判官になって彼らに安らぎのない日々の宣告を与えたい。哀れなティテュオスは禿鷹の爪から解放し、シプリアンをその身代わりとしよう。ロレンゾにはイクシーオンの車輪を持たせて、恋人であるイクシーオンの終わりのない苦しみを終わらせよう。ジューノは過去の怒りを忘れて彼に安らぎを与えるのだ。バルサザーはキマイラの首に吊るして、天上にいる我々の喜びを求めさせながら彼の血に染まった恋を嘆かせよう。サーベリンには石を転がさせて、終わりのない嘆きからシシュポスを解放しよう。人を騙したペドリンガーノは裏切りの罰として煮えたぎるアケロンの川の中を引き回し、終わりのない炎の中で神々とその聖なる名前に悪態をつかせて、死にそうになりながらもずっと生きさせるのだ。

復讐の神 それでは急いでお前の友と敵たちに会おう、友には安らぎを、残りの者たちには悲しみを与えよう。ここでは死によって彼らの不幸は終わったが、あちらでは私は彼らの終わることのない悲劇を始めるのだ。(全員退場)